

年頭の辞



国土交通省 航空局

局長 平岡 成哲

あけましておめでとうございます。平素より日々航空の安全、利用者利便の向上にご尽力をいただいている関係者各位に感謝を申し上げます。

昨年の夏に航空局長を拝命し、原点に立ち返るという意味で、御巢鷹山の慰霊登山に参加し、日本航空の安全啓発センターを見学させていただき、空の安全の大切さを心に刻みました。日々当たり前のように受け取っている空の安全も日頃の関係者の弛まぬ努力の積み重ねがあってこそ初めて実現可能となります。年初に当たり、改めてそれぞれの立場で空の安全の大切さを心に刻み、各人の任務の重要性を思い起こし、業務に邁進していただくことをお願いしたいと思います。

3年の長きに渡ったコロナ禍はようやく終了し、数字の上では国内線はほぼ回復し、インバウンドの復調に伴い、国際線も7割以上にまで回復して参りました。ロシアによるウクライナ侵攻や中東紛争などの影響の懸念はあるものの、より中長期的な視点に立つと、各国の人口増や経済の拡大により航空の国際市場は今後も拡大を続けると予測されています。一方で国内では人口減少が進み、他モードでも大きな課題となっているような、人手不足、ローカル線の維持への対応が必要な状

況が続くと予想されます。航空行政もこうした視点に立って、これまでの常識に漫然と従うのではなく、予想される変化に柔軟かつ的確に対応していく必要があります。

まず旺盛な海外の経済成長を我が国に取り込んでいく、その前提として、航空分野が常に国際競争にさらされているという事実に向き合う必要があります。我が国は巨大な国内市場を抱えているが故に、ともすれば内向きになりがちですが、「空」はつながっています。航空当局としては世界の潮流を見極めながら、国際基準の物差しで自らの規制や政策をアップデートしていく、さらには各国の航空当局とも連携しながら国際的な政策協調やルールメイキングに貢献するという姿勢が求められます。日本の航空局（JCAB）には各国の当局より大きな期待が寄せられており、航空行政において常日頃より世界を俯瞰する視点を忘れないようにしたいと思います。

一方、国内においては、人口減少が加速化していく中、いかに持続可能な航空サービスを構築するかが課題となってきます。そこには他モードの状況を踏まえた総合交通的な視点や空飛ぶクルマなどの新技術の開発状況を踏まえた対応も必要となるでしょう。とりわけ喫緊の課題がグランドハンドリング、保安

検査などの現場での人手不足への対応です。とりわけ厳しい労働環境等の改善が十分ではなかったところ、コロナ禍の影響によって不安定な職業とのイメージが広がり、現在の苦境を迎えている状況です。この問題の根本的な解決のためには、処遇や職場環境を抜本的に改善する必要があります。そのためには最終的には一定の負担を旅客の皆様をお願いをしていくことが必要となるかもしれません。現場の善意と努力のみに依存するシステムは持続性がありません。これを機に空港業務を持続可能なものに変えていく必要があり、関係の皆様方のご協力をお願いします。

また持続可能性の観点からは、航空各社の競争領域と協調領域の見直しも必要になってくるでしょう。これまで地域航空で系列を超えた取組が進められ、今般課題となっているグランドハンドリングにおいても共通化・共同化の取組が進められつつあります。国内のネットワークを維持しつつ公共交通機関としての使命を果たしていくためには、これまで以上にメリハリの効いた協業化・共同化の取組が必要となります。個別の施設や設備の保有、サービスの提供がどこまで各社別であることが必要か、今一度見直す時期に来ていると思われま。

冒頭空の安全の重要性について申し上げましたが、一方でその目的を達成するためにがんにがらめに規制するということでは手段が目的化したり、規制への対応のためいくら人がいても足りない状況に陥ってしまうおそれがあります。場合によっては、金の卵を産む

ガチョウを殺してしまうことになりかねません。このため、経験やデータの蓄積を踏まえてリスクが高い場合とリスクが低い場合とを峻別し、リスクに応じて対応を変える柔軟性も必要となります。そのためには、当局として高い位置に居続けるのではなく、現場と対話を重ね、その状況や声を的確に把握し、PDCAサイクルを回していく姿勢が重要です。

航空局は、各部門や各職種の専門性、独立性が強いプロフェッショナルな組織です。しかし、ともすれば専門性の殻に閉じこもってしまうきらいがあり、同じ職場でも部門が違えばほとんど会話することがない事態が発生しかねません。違う部門、職種であっても目指すところは安全で快適な航空サービスの提供に他ならず、この目的は互いの理解と協力がなければ達成することはできません。また脱炭素、新モビリティへの対応など新たな課題への対応は従来型の各部や職種を超えた取組が必要となります。人類は、他の哺乳類と異なり、横に連携して大きな組織力を持つことができたこと、そして自分の代にはできなかったことを後世に託し、後の世代は先代の築き上げた土台の上にさらに積み重ねを行ってきたことが、今日の地球上での繁栄の源になったと言われていています。各々の持ち場において、コミュニケーションの機会、交流の機会を大切にしながら、組織として大きな力を発揮できるようご協力をいただければ幸いです。

2024年1月1日